誰が何と言おうと普通

蟋蟀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

誰が何と言おうと普通

【コード】

N0692T

【作者名】

蟋蟀

【あらすじ】

産まれた時から異常な彼は異常も含めて彼なのだ。故に異常な事こそ普通だと彼は自負する。

そんな彼は普通、スペシャル特待、異常、三種類の人間が通う箱庭学園へ入学した。

箱庭学園。

広大な敷地面積を誇り、あらゆる運動施設が完備されており、各学年のクラスが13組まで存在するマンモス校である。

そんな学校には普通、イーマル スペシャルブイーマル 特待異常と言った三種類の人間をクラス事に配分している。

その学園では現在、広大な敷地面積に相俟って広い体育館内では全校生徒が集まり生徒総会。つまりは、新しく生徒会長となった人物の自己紹介が行われている。

『世界は平凡か？』

堂々と凜とした声がマイクを通して体育館に響く。

「（違うな。平凡ならば失恋も悩みも事故もイジメも自殺も無くなる）」

『未来は退屈か？』

「（違うな。未来なんざ現在の行動次第で自由に換えられる）」

『現実 is 適当か？』

「（違うな。現実 is 醜くグロテスクだ。適当には過ぎせない）」

『安心しろ。それでも生きる事は劇的だ』

「（安心は出来ないだろ。劇的なんだ。必ずしもハッピーエンドな訳じゃない）」

『そんな訳で本日より私が貴様達の生徒会長だ』

「（支持率98%だろ？ 2%の人間はアンタを認めていない）」

『学業、恋愛、家庭、労働、私生活に至るまで悩みがあれば迷わず目安箱に投書するが良い』

「（人が自身の悩みを簡単に言うと思ってんのか？）」

『24時間365日、私は誰からの相談も受け付ける！！』

新生徒会長こと黒神めだかは全校生徒へ向け啖呵を切る。

多少上から目線な感じは否めないが言い切った。

「（まあ、俺は相談なんてしないけどな）」

先程から黒神めだかの発言に対し否定的な感想を抱く人物、名を真冬（ふゆ）冷姫（れいぎ）と言っ。

美少年の様に美少女の様な綺麗な顔立ちで若干吊り上がった目、背中まである赤みかかった茶髪を首辺りで一本に纏めている。

身長も低く体格も華奢な為、百人中百人が彼を女性だと思っだろう。

生徒総会が終了し彼は一年一組へ向かう。

生徒総会後の一年一組は先程の生徒会長が発した啖呵で話題は持ち切りである。

「冷ちゃん。」

周囲が盛り上がるのを無視し眠ろうとした真冬冷姫の所に、一人の少女が話し掛けてくる。

真冬冷姫は、その美少女の風貌から良く女の子扱いを受け、アダ名ですら冷“くん”ではなく“ちゃん”となっている。

それに対しては軽く否定するが、強くは言わない。

諦めているのか満更でもないのかは定かでは無いが。

「不知火か、何？」

彼が発した声は透き通った綺麗な音をしている。

「相変わらず綺麗な声だね　　で、生徒会長はどうだった？」

彼の数少ない友人である不知火　半袖の問いに一言返す。

「上から目線がウザイ」

「アツヒヤヒヤ　　まゝ冷ちゃんとは相性悪いよねー」

真冬冷姫の返答に笑いながら返す不知火半袖は、独自の独特なステツプで歩きながら机に突っ伏す少年に近寄る。

その少年の名は人吉 善吉。

不知火半袖の友人であるが、真冬冷姫とは入学してから一度も話した事がない。

それでも彼は、彼女の後を追い人吉善吉に近寄る。

「しっかし、あのお嬢様全校生徒を前に良くあれだけの啖呵が切れ
たよねー、人前に立つのが慣れてるとはいえ」

「カツ、アレは人前に立つのが慣れてんじゃねえよ。人の上に立つ
のが慣れてんだ」

彼女の言葉を直ぐ様訂正しながら突つ伏していた体を起こす。

確かに黒神めだかの言動から見るに彼の言葉は正しいのだろう。しかし他人が自分の上に立ち、見下ろされたり見下されたりする事に嫌悪感を抱いている真冬冷姫は、気に食わなさそうな表情を浮かべている。

「 って、キミは？」

「 あー、人吉は話すの初めてだっけ？ この子は真冬冷姫ちゃん」

そんな紹介を始める不知火半袖と友人をしている彼は、彼女の企みを読み取る。

「 初めまして、えっと……仲良くしてくれると嬉しいな」

恥ずかしそうに、遠慮勝ちに、不安そうに、最後には笑顔を付けて

言う。

「あ、ああ……俺は人吉善吉、宜しくな」

若干顔を赤らめながら自己紹介を始める彼を見て、不知火半袖が爆笑し始める。

「アツヒヤヒヤ　人吉くなあに顔を赤らめてんのー？　彼は男だよ」

「　！？」

彼女の暴露に驚愕の色を隠せない人吉善吉に対し、彼等の悪戯が続く。

「信じられない？　触ってみる？」

「い、いや……いい。」

真冬冷姫の発言に再び顔を赤らめ慌てて拒否する。

その態度も不知火半袖のツボを刺激したようで笑い声が大きくなる。

「く、くそ」

「で、人吉はどーすんの？」

一通り満足した彼女が不意に訊ねる。

「あ？」「

「あのお嬢様が当選したって事は、とーぜん人吉も生徒会に入るわけ？」

「カツ、な訳ねーだろ！！ これ以上アイツに振り回されて堪るかつての！！」

人吉善吉は勢い良く席を立ち、人差し指を彼女たち二人に向け堂々とした態度で宣言する。

「俺は生徒会に入らない！！」

そんな彼の後ろでは何時の間にか、新生徒会長こと黒神めだかが居り人吉善吉の態度と台詞を一瞬のズレもなくコピーしていた。

自らの発言が二重となり、それも後ろから聞こえた事に恐る恐る振り返る彼の肩を彼女が掴む。

「まあ、そう連れない事を言うものでは無いぞ善吉よ」

彼の必死な抵抗も虚しく強制連行されて行く。

仮にも男の力を軽々と押さえ付ける腕力は、十三組 異常なスキルを身に宿す彼女のデフォルトなのだろう。

「ありがとね。冷姫」

黒神めだか等の姿が見えなくなった所で不知火半袖が呟いた。

「何が？」

「あのお嬢様に投票してくれて」

彼は他人が自分の上に立ち見下ろされたり見下される事を嫌っている。

故に生徒会長を決める際には、白紙投票を行う予定だったのだが友人である不知火半袖の頼みと言う事もあり、黒神めだかに投票したと言う経緯がある。

「不知火の頼みなら断らないけど、俺のが無くても良かったんじゃないかねえか？」

「それでも嬉しかったよ」

「そう」

彼女が若干顔を赤らめている事に彼は目敏く気付くが、触れないで措こうと一言で会話を終わらせる。

「あ、そー言えば。さっそく目安箱に投書があったらしいよ」

「相変わらず凄まじい情報網だな」

多少呆れながら呟くと続けて口を開く。

「何か食いに行く？」

「奢り！？ だったらパフェが良い」

「じゃ、行くか」

学園から出ようと校門へ向かう最中、剣道場の方が騒がしい様だった。

食べ切ったら一万円のバケツの様な容器に入れられ、高さは不知火半袖の座高を越える特大パフェが置いてある店へ真冬冷姫等の二人が入店した。

その日、真冬冷姫は五万円の臨時収入を得る。

「前から思ってたんだけどさー、人吉って頭悪くない？」

日付は生徒総会の翌日、時刻は昼休憩、場所は食堂。

不知火半袖、人吉善吉、真冬冷姫の三人で昼食を摂りながら彼女は毒を吐く。

人吉善吉の顔や手には複数の傷があり理由を聞いた所、生徒会長と黒神めだかにシゴかれたと呟いた。

それを聞いた彼女の感想が先程の台詞だ。

「何で毎回あの生徒会長に付き合ってるの？ 生徒会じゃないのに」

「うるせえ……」

疲れきった声で反論しながらも顔は僅かに赤い。

真冬冷姫が男だと理解していても、その風貌と声の前では女性と認識してしまう様だ。

「ま、今に始まった事じゃ無いけど」

他人事のように、いや実際に他人事なのだが一切の労いも労りも無いのが実に彼女らしい。

「不知火。口周り汚れてる」

食事に対しマナーも行儀も無い彼女の口許を真冬冷姫がハンカチで拭き取る。

見た目では仲の良い姉妹の様だが、片方は歴とした男である。

「ありがとう」

「ほんと仲良いな二人共」

「愛してるからね」

人吉善吉の呆れた様な呟きに対し、彼等の台詞がハモる。

「……付き合ってるの？」

彼は二人揃っての愛してる発言に面を食らいながらも訊ねる。

「いや、付き合ってる無い」

平然と即答する真冬冷姫の否定により、いつもの冗談かと判断しかけた時、もう一人が口を開く。

「まだね」

これには流石の人吉善吉も絶句する。

この発言から少なくとも不知火半袖は好意を抱いていると判断して間違いないだろう。

“あの”人を買った様な言動をし不明瞭な部分が多く、何を考えて

いるか判断し難い“あの”不知火半袖がだ。

「……………何で付き合わねえの？」

真冬冷姫とは出会ってから三日と経っていないが、恋愛事に鈍感では無いと知っている人吉善吉は彼女の想いを蔑ろにしていると感じ睨み付ける。

「ハーレム造る」

「……………は？」

その返答に怒りは霧散し啞然とする。

「愛されるのは貴重な事だ」

「その通りだね」

ハーレムを造ると言うのは極端な表現で、彼は様々な事情により愛されたいと願っている様で、多くの者もしくは多くの愛情を手にする為に特定の女性と今は付き合う気は無いと言うことだ。

不知火半袖も彼の願いや事情も知っている為、否定はしないが何時かは独占する事を企んでいる。

「お前等は良く分からねえな」

二人の思考に付いていけない人吉善吉は理解する事を諦める。

その後、思い出したかの様に黒神めだかの話に戻る。

「アイツのズレは昔からだからな。自分の優秀さに自覚が無い上に周囲にも同レベルを強要しやがる。だから、アイツには一生分かねえんだよ努力が実らねえ奴、理由も無く凹む奴等の気持ちかな」それを聞いた真冬冷姫は黒神めだかを良く知らない為、そんなモンなのか、と否定も肯定の感想も抱かなかったが不知火半袖は否定する。

「人吉つてさ、あの人と付き合い長い癖に何も解つて無いんだねあの人が悪人倒して“めでたしめでたし”で終わる訳無いでしょ」

その通りだな、と人吉善吉が行程の感想を抱いた時、人吉善吉の後方の席に座っていた少年の呟きが聞こえた。

「めでたく”なつて貰わなきゃ困るんだよ”

「誰だアイツ？」

「同じクラスの日向だったと思うけど」

日向と言う名の少年の呟きには引つ掛かるモノがあったが、気にする事無く談笑をし教室に戻ると午後の授業を受ける。

「（今日もシゴかれてんのかねえ）」

時刻は放課後、場所は剣道場へ向かう道。

特に不知火半袖との約束も無く暇だった真冬冷姫が興味本意で人吉

善吉の様子を伺いに向かう。

「何これ」

血を流す程の怪我をしながら倒れている剣道部員と人吉善吉の姿を見た彼の口からは、普段とは比べ物になら無い無機質な声が出る。

「たつくよ、あの化け物女が……コイツ等潰してくれるだけで良かったつてのに更正だあ？ 余計な真似しやがって」

真冬冷姫の存在に気付かない日向が毒を吐き捨てる。

「ねえ、これアンタがしたの？」

「あ、誰だテメエ……って食堂に人吉と一緒に居た奴が、後片付けがあるんだ出て行ってくれ」

「これやったのテメエかって聞いてんだから答えるよ」

元々、沸点が低めな彼としては数少ない友人に怪我を負わせた相手を目の前に未だ理性を保っているだけ誉められる程なのだが、その上質問を無視され上から目線でモノを言われればキレそうになる。その証拠に段々と言葉遣いが悪くなっている。

「チツ、ああそーだよ。だからどうした」

忌々しそうに、邪魔臭そうに、面倒臭そうに返答をする日向に対し、真冬冷姫の沸点を越えた。

思いつき日向を睨み付ける彼に日向が木刀を叩き込む。

本来ならば気絶もしくは悶絶していても可笑しくないダメージなのだが、真冬冷姫は平然と立っていた。

「な、何で」

これが、彼が生まれ持っていた異常、アブノーマルオール・ノット全否定。

その能力は“不”“無”“非”“未”と言った否定語からなる単語を操る事にある。

今回は、“無痛”と“無傷”を使用しダメージを否定したのだ。

困惑する日向へ彼が拳を叩き込むとワンバウンドする程の勢いで吹き飛び気絶した。

これは“無制限”による人間が力を使用する際にかかる制限セーブを無くしたモノである。

「真冬、お前こんなに強かったのか」

気絶していた人吉善吉が目を覚ましたのは日向が吹き飛ばす所だった為、彼の異常には気付いていないだろう。

「あ、人吉大丈夫？」

外見が美少女である真冬冷姫に心配され、嬉しく思ってしまった人吉善吉が自己嫌悪に陥ったのは此処だけの秘密にしておこう。

その後日、どんな経緯かは定かではないが日向と剣道部員が剣道場を共用し、日向は剣道部員達の指導を行っているらしい。

不知火半袖の情報によると日向は黒神めだかに惚れたらしい。

「あれ、何だこの花」

場所は生徒会室、前日までは無かった筈の花瓶には二輪の花が活けられている。

「うむ、これから生徒会業務を行う指針として、案件を一つ解決する事に花を一輪飾ろうと考えた。取り敢えず二輪だ」

「はっ、女の子らしい所もあるじゃねえか、失敗したらどうすんだ？ 枯らすのか？」

「失敗等しない。しても数えない。いつか見渡す限り一面に花を咲かせるのが私の夢だ」

そう言うと、黒神めだかは目を瞑り空を仰ぐ。恐らくは夢が実現した時を妄想しているのだろう。

「出来んのかね、そんな事。お前が募集会サボった所為で結局役員は増えなかったじゃねえか」

「構わんさ。元より責様を置いて他の誰かと組む気は無い」

「……どれでも良いや、その腕に巻いてるヤツ一個寄越せ」

「どつ言う意味だ……？」

「ッ……振り回されてやるって言ってた!! 気が気じゃ無くて見てらんねえんだよ。やりゃあ良いんだろぅがやりゃあ!! 俺が箱庭学園にお花畑作ってやるよ!!」

「ふん、ヒネクレ者が随分と気を持たせてくれたじゃないか。しかし、まあ一応礼は言っておこう。有難う!!」

礼の言葉と共に黒神めだかは人吉善吉を抱き締める。

普段は古風で男勝りな口調に堂々と凜とした態度な為、この様な女の子らしい態度と口調は結構破壊力があるらしく、人吉善吉はだしなく顔を緩めている。

「しかし、善吉を助けた真冬一年生は興味がある。是非とも生徒会へ入って貰いたいものだ」

人吉善吉曰くツンデレのモードが終了した黒神めだかは、これまた破壊力のある爆弾を一つ落とした。

3 (前書き)

このような駄作を読んで頂き有難う御座います。

気が向いたら感想等を戴ければ幸いです。

「実はな真冬一年生、貴様にも生徒会に入って貰いたい」

真冬冷姫は現在生徒会室に居る。

人吉善吉に“どうしても”と言われた為、行きたくは無かったのだが友人の頼みだからと渋々了承し訪れた。

そして、生徒会長こと黒神めだかと向かい合って開口一番が先程の台詞だ。

彼女の台詞に真冬冷姫はニコツと微笑み、了承を得られるかと思っただが彼は強烈な毒を吐き始める。

「おい、来て貰った礼はどうした？ そっちは俺の都合を考えずに呼び出したんだ。謝罪も欲しいな。あと“貴様”？ テメエ何サマだよ、貴様つて単語辞書で調べてから発言しやがれ、俺はテメエに罵られる謂われも無ければ、親しい仲間でもテメエより目下なつもりもねえ。上から目線が気に入らねえ、人にモノ頼む時は下手に出るのが常識だろうが、ソレが出来ねえなら生徒会長辞めちまえよ俺は困らねえし嬉しいから」

真冬冷姫は黒神めだかを徹底的に否定した。彼の台詞に人吉善吉は啞然とする。

「ふむ、確かに真冬一年生の言う通りだ。では先ず先程の発言の謝罪をしよう。すまなかった。そして、そちらの都合を考えなかった謝罪と態々生徒会室に足を運んでもらい感謝する」

「で、生徒会に入れだったか？」

幾分かは機嫌が悪いらしく真冬冷姫の言葉遣いは未だ悪い。

「そつだ。先日の剣道場での一件と先程の私への発言を考慮し、貴様……いや貴方は申し分の無い人材だと思っている。副会長として是非とも生徒会へ入って貰いたい」

「め、めだかちゃん！？ 何でいきなり副会長なんだよ！？」

「私は常々、副会長として任命すべき人物は私に対して反対意見を述べられる人物と決めているのだ。真冬一年生は先程の私への発言により、その資格があると判断した。どうだろう？ 入っては貰えないか？」

「評価して頂いて有り難いけど、断らせて貰う」

「そ、そつか」

凄く残念そうに肩を落とす黒神めだかの姿に少なからずの罪悪感が芽生え、“自身を評価してくれる人物は貴重”だと罪悪感が芽生えた事を否定しながら口を開く。

「入らないけど暇な時は暇潰しに手伝ってやるよ」

「本当か！？ 今はどうだろう？ 暇か？」

余程嬉しかった様で先程の落ち込んだ表情とは正反対に満面の笑顔を付けている。

「暇だけど？」

「実はな、脅迫を受けていると言う内容の手紙が目安箱に投書されてな、詳しく話を聞く為に被害者を呼んであるのだ」

暫く経ち、廊下から足音が近付いて来ると生徒会室の前で音は止み扉をノックする音がした。

「入って良いぞ」

「失礼します」

有明と言う名の二年生で陸上部所属、短距離を担当し代表に選ばれたのだが、それを快く思わない誰かから嫌がらせ及び脅迫を受けていると、彼女の話を要約するとこの様な感じだ。

彼女の手にはズタズタに切り裂かれた陸上競技用スパイクと新聞か何かの文字の切り抜きを張り付けた脅迫文があった。

脅迫文の内容はシンプルに“陸上部を辞めろ”と言うモノだった。

彼女の要望としては、人間不信に陥りそうで練習にも身が入らない為、今日中に犯人を見つけて欲しいとの事だ。

これだけの情報量で今日中に犯人を見付けるのは難しいだろう。

しかし、それは普通ノーマルな人間を基準にした場合であり此処には異常アブノーマルな人間が二人も居る。

真冬冷姫は携帯を開き、数少ない登録メモリの中から不知火半袖の名を選び通話する。

彼が通話を終えた頃には話は終わっており、有明と言う二年生を帰らせた後だった。

「これは由々しき問題だ。今日中に犯人を見付けようではないか」

「けどさ、これだけの情報じゃ今日中なんて無理だぜ。めだかちゃん」

「ふむ、“陸上部女子”“陸上経験はそれなりに長く”“短距離専門”“左利き”“有明二年生と同種のスパイクを愛用”“文車新聞を購読”“23区に住んでいる”」

「はあ？ 何だそりゃ」

多くの単語を並べた黒神めだかに人吉善吉は意味が分からない様子だが、真冬冷姫は理解する事が出来た。

何故なら、その単語に当て填まる人物を探してくれる様、先程の電話で不知火半袖に頼んだものだからだ。

「犯人の特徴だ」

彼女が堂々と宣言する。

これだけの情報で此処までの推理が出来る彼女が普通じゃ無いことを人吉善吉は改めて実感する。

「因みに、真冬一年生も気付いていたぞ」

「マジで!?!」

真冬冷姫が普通だと思っている彼としては信じられない事だった様だ。

「何で分かった」

「ふ、私を甘く見るな。有明二年生のお話を聞きながらも、お前の通話内容も聞き取れる」

「聖徳太子か、アンタは」

彼女の異常性に呆れた様な苦笑いをしながら呟いた。

「さて、私は人の努力を否定する行為、頑張る人間の足を引っ張る行為が大嫌いだ!」

熱く語る黒神めだかを若干冷めた様な目で眺めていた真冬冷姫には誰も気付かなかった。

「私は怒っている!! 善吉、真冬一年生、目安箱の投書に基づき生徒会を執行する!!」

意気込む彼女に連れられグラウンドへ向かう二人、そこには不知火半袖と三年生の姿が在った。

「彼女は三年九組、諫早先輩で有明先輩と同じく短距離専門のアスリート、左利き。同じスパイクを履いてるのは見てのとおり」

3区内在住で三年前から文車新聞を購読中」

流石は不知火半袖と言った所か、情報に於いて彼女以上の人物は存在しないだろう。

人吉善吉は啞然としているが、真冬冷姫は彼女の頭を撫でる。

「これが終わったら何か食いに行こう」

「焼肉」

彼等が食事の約束をするなか、啞然としていた人吉善吉が話し掛ける。

「いつも思うんだが、その情報どっから仕入れてくんの？」

「アツヒヤヒヤ　人吉が正義側のキャラで居たいなら聞かない方が良いね」

つまり、自分は悪側かソレに準ずる行為をしているのだろう。

「因みに、諫早先輩は有明先輩が代表に選ばれた事でレギュラー落ちしたらしょよ」

「そうか」

「成程な、三年が二年に抜かれたんじゃ屈辱だろうし、犯人は殆ど彼女で決まりだな」

納得するかの様に頷く二人に対し、真冬冷姫はその気になれば彼等

の推理を全否定出来るが、傍観に徹するらしく口を挟まない。

「しかしな善吉よ、実質的な証拠がないのだ。殆どと言う事は絶対ではない。状況証拠だけで他人を悪人と決め付けるのは良く無いな」

「上から目線性善説も良いけどさ物的証拠なんて集められる訳ねえだろ？ 俺ら警察じゃ無いんだし」

物的証拠は状況証拠よりも集めるのに困難で、現状では切り裂かれたスパイクか脅迫文書から指紋を採取する位だろうが、指紋採取の道具も技術も無いシロートでは何も出来ない。

「まさか本人から直接聞く訳にもいかねえ って」

「諫早三年生、このスパイクの件だが貴様が犯人か？」

人吉善吉が言い切らない内に黒神めだかが本人に直接聞き出そうとしていた。

「アツヒヤヒヤ」

「バカだバカが居る」

腹を抱えて笑い転げる不知火半袖、呆れ返った真冬冷姫、お笑い芸人の様にズツ転ける人吉善吉。

「し、知らない！！」

そう返した諫早は逃げる様に走り去る、と言うより逃げているのだらう。

「さてと不知火、あとは会長に任せてりゃ良いだろ。焼肉食いに行くぞ」

笑い転げていた彼女を起こし制服に付いた砂を払いながら告げる。

「そーだね あ、それから人吉、何で制服の下にジャージ来てんの？ ヘンだよ？」

「今頃かよ！？ あと変じゃねえよ。デビルかっけえだろ」

「……ヘン」

不知火半袖の言葉に猛反論していた人吉善吉だったが、真冬冷姫が一言で否定すると沈黙してしまう。

その後、彼等は一時間3800円の焼肉食べ放題へ向かった所、30分で帰って欲しいと社長に泣き付かれたらしい。

その後日、再び有明が生徒会室へ訪れ代用していたスパイクの紛失と新品のスパイクと共に謝罪文書が彼女のロッカーに入っていた事を報告した。

諫早は名乗り出る事はしなかったものの誠意は見せた様だ。

ただ黒神めだかだけは、その意図を理解出来ずに代用スパイクを盗んだ犯人探しを始めようとした所、人吉善吉から必死な説明を受けたそうだ。

暇で暇で暇過ぎた真冬冷姫は暇潰しで娯楽の為に生徒会室へ向かっていた。

「待て、その貴様」

一人の男子生徒の前を通り過ぎた時、その男子生徒が発しソレは真冬冷姫に向けられた。上から目線の言葉に彼は、氷点下を越えた冷たい目をしながら男子生徒の方へ振り返る。

「何？」

彼の声は、あらゆる感情が込められていない極端に無機質な音。

「この偉大なる王の俺を無視して行くとは」

「お前ナニサマのつもり？ コーコーサーの分際で王とか偉大とか、テメエ一人の価値なんざタカが知れてるっての」

真冬冷姫に全否定を吐かれ、男子生徒は芯がブレそうになるが傲慢な態度を継続し言葉を紡ぐ。

「無視した上に偉大なる俺の言葉を遮るとは身の程を知るべきだ
跪け」

その言葉の後は特に何も起こらなかった。

しかし、起こらないからこそ異常なのだ。

「な、偉大なる俺の圧政^{ことば}が効かないだと!？」

「あ? 何かのスキルか? はは、そんなモン俺には“無効”だ。
じゃあ取り敢えず 跪け」

その言葉の直後、男子生徒は何かの圧力により強制的に跪く。

「な、何故この俺が!？」

真冬冷姫の第2の異常、有言実行^{キワード}。

この能力は“全否定”の“無制限”でも解除出来ない色々を使い勝手の悪い制限があるが、ON・OFFの切り替えが可能でONの状態^いで彼の言葉を聞いた者は強制的に実行させられると言うモノ。

「お似合いだな、実に似合ってる。テメエに王サマなんて似合わない」

ピシッと男子生徒の心の芯に罅が入る音がした様な気がした。

「へえ……。それじゃあ俺は行く」

真冬冷姫は男子生徒の心の芯をへし折るつもりで、否定の言葉を並べたのだが目論見は外れてしまう。

しかし、ソレは彼にとって耐久力が少し高いだけの玩具でしかない。綺麗な顔立ちをしているにも関わらず、鳥肌が立つ程の歪んだ笑みを浮かべると生徒会室へ向かった。

生徒会室には黒神めだかのみが居り、依頼が在ったらしく人吉善吉は不在であった。

「仔犬探しねえ」

真冬冷姫は生徒会室から退室すると、人吉善吉の元へ向かおうと歩き出す。

居場所など知らなくても、“無意識”なまま歩を進めると校舎裏付近に人吉善吉と不知火半袖の姿が見えた。

「不知火、人吉」

「あれー冷ちゃん どうしたのー？」

「暇潰し。つーか、随分とデカイ仔犬だな」

見た目では絶対と付くまで仔犬とは呼べない大きさで、犬と呼ぶにも抵抗がある生物を見て平然と言ってみせる真冬冷姫に人吉善吉が慌てた様にツツコむ。

「いや、あれは違う。散歩中に飼い主とはぐれた可哀想な犬じゃない！ー！」

「やだなあ人吉、あれはボルゾイって種類の歴とした犬だよ 別名ロシアンウルフハンウンド」

平然とした態度の真冬冷姫とは対象に完全に怯えた人吉善吉、そんな彼等に明るい声で説明を始める不知火半袖。

「ほら！！ ウルフって入ってんじゃない！！」

「成程、格好良い訳だ」

やはり真冬冷姫は、何処かズレている様だ。

「つーか、嘘だろ？ 俺今からアイツ捕まえんの？マジで？
くっそ、信じらんねえ……。不知火、真冬達は手伝ってくれるよな？」

「え！？ あたしが！？ 何で！？ ヤだよ！？」

“あたしが”の部分が真冬冷姫の場合“俺が”に変わっただけで、二人は一語一句タイミングまで合わせて言い放った。

「ハモって拒否ってんじゃないよ！！ つーか、手伝ってくんねーの！？」

「あたしは親友のアンタが酷い目に遭うのを安全圏から眺めたいだけの人間だから！！」

「……人吉頑張って」

「不知火、お前は人間じゃねえよ！！ それから真冬、上目遣いで言っても騙されねえぞ！！」

「チツ、最初は俺の一挙一動に赤面してた癖に」

「言っちなあああ！！」

真冬冷姫が人吉善吉で遊んでいると、ボルゾイ 恐らく失踪中に半分野生に戻ってしまい成犬となったと思われる は、ただ単に吠えただけなのだが人吉善吉には空気が震えた様な錯覚を起こす。

「ダメだつてコレ、アイツめっちゃキレてんじゃん！！ 食い散らかすぞ人間風情がつて絶対言ってるだろ！？」

「いやいや、お兄ちゃんこっちにおいでよ、一緒に遊ぼうよって言ってるんだよ」

「違うな。鬼ごっこがしたいんだ、アイツは」

「待てよお前等！！ 両方明らかに違和感ありまくりだつつの！！ つーか、真冬のはリアル鬼ごっこだろ！！ 捕まったら死ぬだろ！？」

ビビりまくっている人吉善吉は、どうしても一人で捕まえられない様で必死に説得する。

「いや俺等、生徒会じゃねえし」

切り札だった。

生徒会じゃない以上手伝う必要も義務も無い。

そんな所へ不知火半袖が声をかける。

「人吉ーこれ使いなよ」

そう言つて手渡されたのはソーセイジ。

「成程な！！　これを囿にして捕まえるって事か！！」

「え？　いや、そーじゃなくてさ、コレをお腹に仕込んでー、ギャアアア！　内蔵食われたー！　と見せかけて実はソーセージでした　　ってギャグやって欲しいの」

「……不知火、お前は俺の想像を越えた人間になるな」

「褒めても何も出ないよー、キヤツ」

若干の憎悪を込めた皮肉を言い放つ人吉善吉に対し、何故か誉め言葉として受け取った不知火半袖は恥ずかしがる様に顔を隠すが、赤面はしていない。

「つーか、ゼツテやらねえよ！！」

「うわ、ダメダメ、人吉ダメ過ぎ」

彼の全力拒否を見て、テンションが下がり過ぎたのか蔑む様な目で罵倒する。

「この、じゃあ真冬やれよ！！」

「は？　やだよ」

二人のやり取りを見て笑っていた真冬冷姫に人吉善吉が強要しようとしたが、無表情な上に高速で拒否される。

「そーだよ人吉、自分が嫌な事を人にやらせるのは良く無いよ」

流石は真冬冷姫に恋心を抱いているだけあり、先程の態度とは真逆である。

「なら不知火！！ テメーが自分でやれ！！」

「信じられない！！ 女の子にやらせる気！？ 神経疑っちゃう」

不知火半袖を相手に口で勝つなんて事が出来る訳も無く、人吉善吉は忌々しそうな態度で引き下がるが依然として犬の捕獲を行わない。そうこうしている間にボルゾイは逃げ出してしまう。今回は此处で終了する事になった。

「ヘタレー、ヘッターレー。ひつとよっしのヘッターレー」

当然、こんな弄りがいのあるネタを不知火がスルーする訳も無く、先程から人吉善吉へ精神的ダメージを与え続けている。

「だああああ！！ ウルセーよ！！ そんなに言うなら手伝ってくれたら良かったろ！？」

「他力本願みつともなあい」

「実行もせずに直ぐに助けを求めてたら成長しないぞ？」

この二人相手に口では勝てないと、そろそろ学習してきた人吉善吉は押し黙る。

日付が変わり、放課後になると、食事に行く約束をしていた真

冬冷姫と不知火半袖の元へ人吉善吉が訪れる。

「行かねえよ。十分楽しんだし」

昨日捕り逃した犬の捕獲を行う様で、今回は黒神めだかも参戦するらしいのだが、何故か二人を連れて行こうとする人吉善吉。

しかし、真冬冷姫としては、不知火半袖とのデートの方が貴重で優先事項な上、先日の一件は暇だったので見物していたに過ぎない。

「面白そーだし、行こーよ」

「よし、行くか」

なので、先程の台詞を発言したのだが、不知火半袖の一言で簡単に意見は変わってしまった。

「良い性格してんな真冬」

人吉善吉は尤もな愚痴を吐く。

場所は先日と同じく校舎裏付近。

そこに先日捕り逃したボルゾイ、別名ロシアンウルフハンウンドと何故か犬の着ぐるみを着た人物が居た。

と言うか、生徒会長こと黒神めだかだった。

「お嬢様、つかぬ事お聞き致しますが何ですかソレ？」

完全に無視をしようとした人吉善吉と真冬冷姫だったが、良い意味でも悪い意味でもKYな不知火半袖が単直に問う。

「ん？ 解らんか？ 演劇部から拝借してきた」

その様な事は不知火半袖も解っているだろう、彼女が聞いているのは何故借りて着ているのか、と言う部分である。

「ターゲットに仲間だと思って貰う作戦だ！！ 動物と触れ合う時は此方から歩み寄ってやらねばな！！」

彼等、三人の時間が凍り付いたのは気の所為では無いだろう。

「ねえ人吉、このお嬢様ってひよっとしてさあ……」

「あー、気付いた？ 一周回って基本バカなんだ。めだかちゃんは」

「俺は陸上部の時から薄々感づいてた」

ヒソヒソと黒神めだかに聞こえない様に話す一同は揃ってため息を吐いた。

「所でさ、アイツは何であんなに怯えてる訳？」

そう指摘する真冬冷姫の言う通り、先日とは打って変わってビクビクと震えながら、黒神めだかから距離を取るボルゾイ。

「あー、だからな、めだかちゃんが動物を苦手なんじゃなくて、動物がめだかちゃんを苦手なんだよ。本人は動物大好きなのに」

その言うと、人吉善吉は語り口調で過去の話始める。

曰く、飼育委員に任命された彼女だったが兎は穴蔵へ潜り姿を見せなかった。

曰く、餌を与えようと池に近付くも鯉は水中深くに潜り姿を見せなかった。

曰く、動物園に行けば一匹として彼女の前に姿を見せなかった。

動物が大好きだと言う彼女にとっては、これ以上無い悲しい出来事なのだろう。

人吉善吉の昔語りが終わる頃に、ボルゾイが黒神めだから逃げる様に全力疾走で真冬冷姫の影に隠れる。

「……人吉、俺と不知火が責任持ってコイツを飼い主の元へ届ける」

少しの沈黙の後、突然真冬冷姫が言い出した事の真意が見えない人吉善吉は、訝しげに視線を向ける。

「アレは任せた。行くぞ不知火」

「おっけー　なかなか楽しめたよ人吉」

逃げるかの様に立ち去る二人に更に訝しげに視線を向ける人吉善吉だったが、不意に放置されていた黒神めだけに視線を向ける。

そこには、着ぐるみを着たまま座り込み完全に落ち込んだ黒神めだかの姿が在った。

「……逃げやがったなあ！！」

何て事はない。落ち込んだ黒神めだかを励ます等と言つ面倒臭い事を人吉善吉に押し付けたのだ。

仔犬探しの件から数日経ち、特に予定の無かった真冬冷姫が人吉善吉と共に生徒会室へ向かう。

生徒会室の扉を開くと下着姿で立っている黒神めだかが居た。

その姿を見た人吉善吉は目にも止まらぬ速さで部屋のカーテンを全て閉めた。

「鍵を閉める！！カーテン閉める！！人目を憚れ！！何度言ったら解るんだ！？」

どうやら日常茶飯事の様なのは人吉善吉の台詞から読み取れる。

「何を言う？この練り上げた肉体を衆目に晒す事に躊躇う必要が何処にある？」

「寧ろ、見せたいみたいいな事言ってるじゃねえ！！」

この黒神めだか（バカ）に思春期と呼べるものが有るのかは不明だが、仮にも年頃の女性が取るべき言動ではない。

「見苦しいから服着ろ」

そう発言する真冬冷姫がクールなのは今に始まった事では無いが、仮にもスタイル抜群な女性に向かって平然と“見苦しい”と言える男は彼か幼馴染みとして慣れている人吉善吉位だろう。

まあ、見苦しいと言うのは正論である。

黒神めだかは真冬冷姫の言葉に納得したのか、柔道着の袖を通す。

「柔道着？ 今日柔道部か？」

「そつだ。目安箱に投書が有つてな」

その内容は新部長の選定を手伝って欲しいと言うもの。

実際、そう言うモノは一番実力が有る者、人望が有る者、リーダーシップが取れる者の三種類の人間に絞られる。

そう言うモノは部外者である生徒会長より部の事を一番知っている現部長が行うべきだろう。

そこまで思考を巡らせた真冬冷姫は、一つの可能性を導き出す。

「（他に目的有りつて事か）」

一周回って基本バカな黒神めだかは気付いていない様だったが、彼は面白くなりそんな予感がし付いて行く事にした。

「やーやーようこそ、いらっしやいませ。ウチが差出人の柔道部長、鍋島猫美でっす！ 本日はどうぞ宜しく」

柔道部に到着した一行を出迎えた彼女は柔道界の反則王と呼ばれている様だ。

「生徒会長の黒神めだかだ。今日は出来る限りの事をさせて貰うぞ」

「うんうん、頼りにしとんで黒神ちゃん」

挨拶を交わし握手をする二人だが、鍋島猫美の方は誰にも悟らせない様に嫌悪感を隠している事に真冬冷姫が気付かない訳が無かった。

「いやー、ウチは部長て言うても名前だけみたいなのモンやからな、誰に後継がせたらええのか決められんかってな」

スラスラと嘘を並べる鍋島猫美と、嘘を嘘と疑わず鵜呑みにする黒神めだかの態度に笑いそうになる真冬冷姫。

「あ、そーいや、ジブンに挨拶したいっちゅー奴がおんねん」

「ん？ 私にか？」

「おーい、阿久根、阿久根クン！」

鍋島猫美が呼ぶと更衣室か何かの個室から、キザつたらしく髪を掻き分けて登場すると、黒神めだかの前でかしついた。

「ご無沙汰しております、めだかさん。生徒会立ち上げの大事な時期にお気を煩わせまいと控えておりましたが、ずっと貴女に再開出来る日を心待ちにしておりました」

その姿は、まるで物語に出て来る姫に忠誠を誓う何処かの騎士の態度である。

「堅苦しい真似はよせ阿久根二年生。他の者が見ておるぞ、貴様程の男がその様に振る舞っては示しが付くまい」

「いえ、誇りこそすれ貴女にかしづく姿を恥とは思いません。今の俺が在るのは貴女のお陰なのですから、幾ら感謝しても足りない」

阿久根高貴の言葉を遮り、黒神めだかが肩を掴む。

「私に感謝しているのならば、頭を下げるな胸を張れ!!」

「は、はい!! 　めだかさんの御心のままに!!」

これは、もう忠誠の域ではなく酔狂と呼ぶべきだろう。

黒神めだかの何処に惹かれる部分があるのか解らない真冬冷姫は、この茶番劇を見せられ気分は最悪である。

「さて、本題に入らねばな。後継者の選定だったな、阿久根二年生は例外として我こそはと思う者は名乗り出よ、全員纏めて一人残らず私が相手してやろう!!」

そう勇んで構えを取る黒神めだかは、それなりに人数の多い柔道部員を本気で全員相手にするつもりらしい。

「ナメられたモンやなー、我が栄光の柔道部も」

反則王と呼ばれながらも、少なからずのプライドは有るらしく黒神めだかの言動が気に召さない様だ。

「無理からぬ話ですよ。いくら専門分野とは言えめだかさんと相手になるのは俺かアンタくらいでしょう」

阿久根高貴が鍋島猫美に反論した所で、黒神めだかが副部長を勤めている人物を投げ飛ばす。

「しかし、流石だなめだかさんは。中学生の頃より輝きが増している！！」

輝きが、どうこうは置いておき、大人数を相手に息一つ乱さないのは流石は13組いじみぐみと言う所だろう。

「それはそうと、久しぶりだね。ええと名前は何だったかな？」

「人吉善吉ですよ。所でアンタ一体誰ですか？」

売り言葉に買い言葉と、この二人は犬猿の仲の様で顔を会わせて早々口喧嘩が始まった。

「虫が！！ 相変わらずめだかさんの足を引つ張る仕事に精を出してる様だな！！ 言っておくが、めだかさんの支持率が100%に達しなかったのは全てキミの所為だぞ！！」

人間が数多く集まれば必ず価値観の違う者やアンチと言った者は存在する。

黒神めだか至上主義の阿久根高貴を心底気持ち悪いと思う真冬冷姫。

「カツ、そんな意地悪言わないで下さいよ！！ 人格者で通ってる柔道界のプリンスが下級生イジメなんて、ファンの女の子が泣いちゃいますよ？」

「ふん、俺は心身共にめだかさんに仕えるつもりだ。めだかさんの為になるのなら毒蛇の如く嫌われ様と望む所だ!!」

堂々と一切の躊躇いも無く宣言する阿久根高貴だが、解っているのだろうか？ 黒神めだかの為に嫌われると言う事は自ずと黒神めだかも嫌われる事になると言う事に。

恐らくは気づいていないだろう。嫌われるのは自分だけで黒神めだかには一切の迷惑が掛からないと思っているのだろう。

黒神めだかの性格上、自分の為に嫌われ者になる阿久根高貴を許容出来る訳が無いのに。

綺麗で美しく、同時に浅はかで醜い自己犠牲の精神、自己満足にも程があると真冬冷姫は心の中で全否定吐いた。

「虫はどうでも良いとしてキミは？」

「ああ、コイツは真冬冷姫で俺の友達だ」

そこで初めて阿久根高貴が真冬冷姫の存在に触れ、何故か本人よりも先に人吉善吉が紹介する。

「虫には聞いてないよ。しかし、貴女のように綺麗な方が何故こんな虫と友達などしているんだ？」

どうやら彼も真冬冷姫を女性だと勘違いしている様だ。

「俺は男ですよ。先輩」

「な、そうだったのか！？ てつきり女性だと……いや、すまない俺は2年の阿久根高貴だ。宜しく」

「真冬冷姫、宜しく先輩」

非礼を詫び自己紹介を始める彼は、少なからずは初対面の人物に対する礼儀を弁えている様で、上から目線でモノを言われない限り愛想の良い方の真冬冷姫は自己紹介で返す。

そんな二人の耳に鍋島猫美と会話していた人吉善吉の言葉が届く。

「生徒会には無理矢理入らされたんです」

黒神めだか至上主義の阿久根高貴が、そんな言葉を聞けば黙っている訳もない。

「そうか、無理矢理だとほざくか、だったら俺が替わってやろうか？」

人吉善吉は突然の言葉に呆けた表情をする。

「思い付きで言ってる訳じゃ無い。めだかさんの同情心に免じて此までは見逃して来たが流石に潮時だろう？ それに何も出来ない虫の様な虫とはいえキミももう高校生だ。大きな石の下に居たい虫の習性は解るが、そろそろ独り立ちするべきじゃないかい？」

「独り立ち出来てねーのはどっちですか、何も出来ない？ 変な変態を近付かせない事くらい出来ますよ」

“何も出来ない”と言う台詞に反応した人吉善吉が言い返し阿久根

高貴と睨み合う。

「まーまー、喧嘩は辞めーや此処は神聖な柔道場やで」

仲裁に入った鍋島猫美は何かを企んだ笑みを表情に浮かべている。

「せや、此処は一つ柔道で決着付けるってのはどうや？ 阿久根クンが勝ったら生徒会に入って、人吉クンが負けたら柔道部に入ってウチの後継者になるんや」

スペシャル
招待生である阿久根高貴ノーマルに一組の人吉善吉が勝てる見込みは極端に少ない。

「これが目的ですか？ 先輩」

「そつや、ウチは人吉クンみたいな頑張り屋さんが好きやからな」

此処まで話を進めれば隠す必要も無いのだろう。

柔道着に着替えた二人が向かい立つ。

「ルールは柔道部恒例の阿久根方式や！ 無制限十本勝負対無制限一本勝負！ 阿久根クンに十本取られる前に一本でも取れば人吉クンの勝ちやー！」

鍋島猫美のルール説明が終わると向かい立つ二人は互いに挑発を始める。

「ふん、尻尾を巻いて逃げなかった事だけは褒めてやる。ああ、でも虫に尻尾は無かったか」

「何ですか、逃げるってアリだったんですか？ 先に言っというて下さいよ。そう言う事は」

「逃げる？ そんなものアリな訳が無かるうが」

これは挑発、あくまで挑発なのだ。そもそも人吉善吉は逃げる気など更々無いだろう。

しかし、真に受ける人物が此処に一人。

「誰からの相談も誰からの挑戦も受け付ける。如何なる内容でも如何なる条件でも如何なる困難でも如何なる理不尽でも享受する！！それが箱庭学園生徒会執行部だ！！ 人吉善吉、私は負けるなどは言わんが逃げる事は許さんぞ！！」

「（面倒臭い女）」

誰もが心揺さぶられる名言の様なモノを真冬冷姫はバツサリと切り伏せる。

黒神めだかの名言が終了すると同時に試合を始めた二人だが、数分と経たず人吉善吉が綺麗に投げられる。

「さっすが阿久根クン綺麗な一本やな！。ジブンこれ見てどう思う？」

真冬冷姫の側に来た鍋島猫美が訊ねる。

「…………別に何とも」

「そうなんや。ウチはな阿久根くんは天才やと思うんや。ほんま天才的で、つまらん柔道や」

「どうやら随分と天才がお嫌いの様だな鍋島三年生」

「うん、嫌いやで。大嫌いや、黒神ちゃんの事も阿久根くんの事もな。才能を努力で踏みにじりたあてウチは柔道やっとなのや」

これが彼女の信念なのだろう。

「ま、黒神ちゃん。天才は天才同士、凡人は凡人同士連るもつやないか、ウチの柔道に阿久根くんは要らんジブンにやるわ。そんな代わり人吉くん頂戴」

「ふむ、なら安心しろ鍋島三年生。天才など居ない」

黒神めだかが言い切ると大きな溜め息が聞こえ、そちらの方へ視線を向ける。

「何か言いたげだな真冬一年生」

「天才は居ない？ 此処の柔道部員から見ればアンタは十分に天才に分類される。アンタは今日一日で今日まで努力してきた何十人の努力を否定したと思ってるんだ？ 特に何年も練習した訳でもない女に勝てない、負ける。ソレがどう言う事が解らねえのか？ アンタは上も下も無いとか考えてんだろつが、十分にアンタは上で此処に居る奴等は下だ。上からモノ見てんなよ下の奴等の視点も考える。だから」

「だから、何や？」

不自然に途切れた真冬冷姫の全否定とくの続きを促す鍋島猫美だったが、「何でもないです」と真冬冷姫は言葉を紡ぐ。

彼に全否定され何も言えなくなった黒神めだかは、離れて行くと人吉善吉の試合を見る。

「ジブンよう言ってくれたわ。スッキリした」

「俺は、ああ言つ上から目線の奴も綺麗事吐く奴も嫌いですからね」
そこで、人吉善吉が九本目を投げられ後が無くなってしまふ。

「善吉！ いつ如何なる時でも私は貴様に負けるなどは言わん、だから勝つて！！」

いつも堅物な彼女の若干涙目で上目遣いを見た真冬冷姫は引いてしまった。

しかし、ソレは負けるなど言ってる事と同じなのでは無いだろうか？

「貴様が居なくなったら凄く嫌だぞ。困るぞ、泣いちゃうぞ！！」

黒神めだかの言葉で人吉善吉はヤル気が出た様だが、真冬冷姫は腕を口に押さえ付け必死に笑いを堪えていた。

その後の結果は双手刈りで人吉善吉が一本を取り勝利する。

「信じられへん。阿久根クンにホンマに勝つてもうた。いや、それ

より双手刈りならウチもよう使うけど、あんな綺麗には……」

「綺麗も汚いも無いし天才も凡人もいない。居るのは、ただ懸命な人間だけだ。私も貴様も真冬一年生も変わらんよ」

そう言うと視線を真冬冷姫の方へ向けるが、当の本人は視線を外しソッポを向いている。

「（俺とアンタが変わらない……ねえ）」

「それなら、真冬くん頂戴」

真冬冷姫が侮蔑する様な感想を抱いていると鍋島猫美が次の一手を取る。

「駄目です。真冬一年生は生徒会に欲しい人材だからな」

「じゃあ、また柔道で決めようや」

トントンと話が進む中、口を挟んでも無駄だろうと判断して真冬冷姫は流れに身を任せる事にした。

「ルールはさつきと一緒に十本決まる前に真冬くんが一本取れば勝ちやー!」

「鍋島先輩。俺も多分、貴女の嫌いな天才に分類される人間ですよ？ ソレでも良いんですか？」

この台詞は鍋島猫美のみが聞き取れる音量をしていた。

「構わへんで、ウチは真冬くんが気に入ったさかい」

真冬冷姫は溜め息を吐くと阿久根高貴と向かい合う。

「外見の所為で少々やり難いが本気で行くよ」

「どうぞ」

両者は構えを取り動かない。

「来ないのかい？　なら、此方から攻めよう」

突進してくる阿久根高貴の体を前方へ崩し、真冬冷姫は後方へ身を捨てると同時に足で相手の体を押し上げると投げ飛ばす。

「と、巴投げ」

「特待生にあっさり勝ちよった」

「うむ、流石は真冬一年生」

驚く人吉善吉と鍋島猫美に何故か知った顔をする黒神めだか。

「だから言ったでしょ？」

俺は天才に分類される人間ですよ　と鍋島猫美は思い出す。

次期後継者の選定は結局忘れられ、この依頼は終了した。

生徒会一行は部費の陳情が余りにも多かったため、プール施設を使ったイベントを開く事にし真冬冷姫にも生徒会から協力の要請があったのだが、特に興味の無かった彼は気が向いたら行くと適当な返事をした。

そして、イベント開催日。不知火半袖が実況、解説を行うとの情報を手に入れた真冬冷姫は、彼女と立てた企みを実行する為プール施設に向かっていたのだが、彼の目の前に居る巨体な男子生徒に行く手を阻まれている。

「お前が真冬冷姫だな」

巨体な男子生徒は威圧感のある声で訊ねる。

「そうだけど、何？」

「お前は危険だ」

真冬冷姫は自分自身が危険人物だと自覚はあるが、危害も加えてもない初対面の人間に言われる筋合いは無い。

「……」

しかし、真冬冷姫は全否定を行わない。

と言うよりは行えないのだろう。無言なのは肯定を指している。

「お前は、此処の生徒の害にしかない。俺から理事長に推薦状

を書いて貰う。好きな学校へ転校をしる」

「……二つ質問。一つアンタ何者？ 二つ拒否したら？」

「俺か？ 俺は日之影空洞、元英雄。拒否した場合は力付くと言う事になる」

「英雄、ね……アンタは只の偽善者だろ？」

真冬冷姫は日之影空洞を睨み付けると今度こそ全否定を始める。

「なに？」

日之影空洞は納得がいかない。そう言いたそうに真冬冷姫を睨み返す。

「アンタが守ってるのは箱庭学園ココの生徒だけ。他校よその生徒は、どうなっても構わない。相手が拒否したら暴力ちからを振り翳めいれいして強要する。こんな奴を英雄なんて誰が呼ぶ？ 少なくとも危険人物オレを飛ばした学校はの生徒はアンタを怨むだろうな」

「成程な。ソレがお前のアソイマール異常性が、確かに心が折れそうになるが所詮、屁理屈だ」

真冬冷姫の全否定を受けても怯む事無く威圧を続ける日之影空洞はある程度、彼の情報を手にしているらしい。

「ああ、そつだ。全否定コレは正論と理屈を並べただけの屁理屈だ」

真冬冷姫と言う人物は、相手や自分、感情や言動、その他諸々全て否定してはいるが、肯定を行わない訳ではない。

否定した事を否定するとソレが肯定になる様に、彼の全否定は“不^{スキル}完全”で“未完成”である。

「さあ、出て行くか？ 力付くで追い出されるか？」

全否定を真冬冷姫の異常性だと思っている日之影空洞は、アツサリ肯定した彼に驚いていたが話を先に進める。

「そつだな。……拒否しよう」

「そつか、残念だ」

この台詞を最後に日之影空洞の姿は真冬冷姫の前から消える。

その直後、真冬冷姫の体が真横へ吹き飛ぶ。

吹き飛んだ彼は校舎へ体を叩きつけられるが、何事も無かったかの様に平然と立っていた。

「ソレがアンタの能力か？」^{スキル}

「そつだ。知られざる英雄^{ミスターアンノウン}。俺を認識出来なくなる」

「ふーん。つまり今のは地力って訳かバケモノだな」

そこまで言った真冬冷姫だったが、日之影空洞との戦闘を認識出来無くなり能力を解除した所で再び吹き飛ぶ。^{スキル}

砂の上に転がる形となった彼の頬は殴られた箇所と思われ赤く腫れ

上がり、口からは血を流す。

「……………」

ユラリと立ち上がる真冬冷姫は“無傷”を使用し頬の腫れと口内の傷を消す。

「チツ、厄介な能力だな」

「……………る……………る」

「何か言ったか？」

忌々しそつに言う日之影空洞は真冬冷姫の呟きが聞き取れず、再度聞こうとしたが彼の前から真冬冷姫の姿が消える。

「なっ！？ 知られざる英雄ミスターアンソウンじゃねえな。何なんだコレは」

何も驚く事はない。只の“不可視”なのだから。

日之影空洞が真冬冷姫の姿を見付けた時、その手が彼の体に触れていた。

「ハハッ、“無惨”な姿で殺してやる」

真冬冷姫の笑顔は子供が玩具で遊ぶかの様に“無邪気”なモノだったが、声の方は“無機質”な音を発していた。

一瞬。抵抗も瞬きの時間もなく、日之影空洞が着ている制服が切り裂かれると、肉を裂かれ、抉られる。四肢の骨は複雑骨折している

と思われる。

健康体の否定、明らかに彼の狂気が垣間見られる。

引き金となったのは、やはり日之影空洞に与えられた傷が原因だろう。

真冬冷姫は校舎に背を預け座り込んでいる日之影空洞に近付いていく。

時間になると10分程度の情事だっただろう。

生きてはいるだろうが日之影空洞の呼吸は絶え絶えな上に、何かあったのか彼の両肩、両腕、両手、両足には木の枝が突き刺さり校舎に縫い付けられていた。

木の枝が突き刺さった部位からは血が滲み、枝から滴っていた。

その場に真冬冷姫の姿は既に無く、日之影空洞の耳には死にたくなければ関与するな　と真冬冷姫の脅しが残っていた。

そのまま、日之影空洞は意識を失った。

『最後の種目は水中騎馬戦です！ それではルール説明を不知火さんお願いします』

『はいはい　まあそんなに身構えなくても只の普通な騎馬戦だよ　ただし、今のままじゃ下位チームに救いが無いから救済ルール。集めたハチマキの数じゃなくて質でポイントを決定！ 上位チームのハチマキほど高くポイントを設定するよ』

このルールに諦めていたチームもヤル気になり、盛り上がって来た所で更衣室から現れた存在により辺りが静まり返る。

腰まである赤みのかかった茶髪に小柄で華奢な美少女が、生徒会チームに近寄る。

周囲からは「可愛い」や「あんな娘、生徒会に居たか」など別な意味で男性陣が盛り上がり、女性陣からは大分引かれていたり、彼女持ちの男子は殴られていた。

この状況を実況ブースでは不知火半袖が、爆笑しながら見学しているのを真冬冷姫が感じながら企みを続行する。

「お待たせ。人吉」

透き通った綺麗な声で満面の笑顔を足して話し掛けるが、人吉善吉は目の前の人物を真冬冷姫だとは解らない様で、見ず知らずの少女に親しげに話され困惑する。

「ふむ、女子生徒用のスクール水着が良く似合うじゃないか、真冬一年生」

「ほんま、何処からどう見ても可愛らしい女の子やで真冬くん」

しかし、どうやら騙せているのは男子のみで、黒神めだかや鍋島猫美と言った女性陣にはバレている様だ。

「……まじ?」

「完璧だろ? 俺の女装。じゃ逃げるわ」

女装と言っても女子生徒用のスクール水着を着用し髪を下ろしただけである。

悪戯に成功した真冬冷姫は、男性陣からの報復から逃げる様に更衣室に消えて行く。

「アツヒヤヒヤ さっすが冷ちゃん」

数分後、復活した男性陣が先程の出来事を黒歴史として抹消したが、速やかに競技へと移行する。

暫くし、実況ブースに着替え終えた真冬冷姫が顔を出す。

「なあ、アイツ何で同姓とキスしてんの？」

「さあ？ 知らない そんな事より、なっかなか傑作だったねー」

「男は完全に騙せたよな。女は不知火の言った通り全然だったけど」

二人は心底楽しそうに笑いあう。

真冬冷姫に至っては少し前まで日之影空洞と死闘を行っていたにも関わらず。

しかし、彼にとっては普通な事だ。

その日、真冬冷姫は一風処では無い変わった夢を見る。

何処かの学校の何処かの教室、縦横5列ずつ並べられた中央の席に彼は座っており、その席の机に一人の少女の姿があった。

真冬冷姫の顔を覗き込む様な体制で少女が微笑む。

「久しぶりだね。冷姫」

「……顔が近い。キスしてやろうか？ なじみ」

少女の名は安心院なじみ。

彼と彼女の顔の距離は僅かに数センチだった。

「半年ぶりに会ったと言うのに第一声がソレかい？」

「そんなに経つのか、会いたかったよ。なじみ」

未だに至近距離の場所に顔がある二人は、このままキスをしてしま
いそうな甘い雰囲気を晒す。

「ふふ、僕以外の女の子を侍らせて居たのにかい？」

「なじみは、全否定^{オレ}を理解してくれてるだろ？」

真冬冷姫は全てを否定して生きている。愛に飢えているにも拘わら
ず自身へ向けられている愛を否定しているのだ。

そんな彼だから、その否定すらも否定する程の愛情を向けなければ
ならない面倒臭い部分もある。

「勿論、解っているよ冷姫」

二人は楽しそうに雑談に花を咲かせる。

時に愛を囁き、感じながら過ごす。

「そろそろ、起床時間だよ。冷姫」

「そうか、また次回な。なじみ」

真冬冷姫は安心院なじみの頬に唇を当てると教室から姿を消した。

「ふふ、彼の前だと平常心を保つのも大変だ」

耳や首までも真っ赤にさせた安心院なじみがクールな声色で呟いた。

翌日、生徒会室には黒神めだか、人吉善吉、阿久根高貴に加え喜界島もがなの姿があった。

「会計の喜界島もがな一年生だ。競泳部からのレンタルだから大切に扱う様に」

「荒稼ぎに来ました。無駄遣いしたら売り飛ばしますので、そのつもりで！」

生徒会のメンバーが一人追加された。

風紀委員会。

風紀委員長を務めているのは、若干9歳にして箱庭学園に入学を果たした少年で、現在二年十三組に所在している異常者^{アブノーマル}である。

その少年の名は雲仙冥利と言い彼は今、オーケストラ部に訪れていた。

子供の外見とは裏腹に滲み出る気迫、或いは殺気だろうか？

「えーと、今回は皆さんに殺し合いをして貰いまーす。　　って違う違う！　ダメだなー、俺ってホンツとにダメだ！　大人数を見ると、つつい殺し合いをさせたくなくなっちまうぜ」

そう言う雲仙冥利の表情には不気味とさえ思える笑みが貼り付けられており、発言内容も危険極まり無い程のモノ。

ダメだと自分を批難する言葉は嘘臭さも伺える。

「えー、では改めまして。オーケストラ部の皆さんコーニチハー！　僕ちゃんは風紀委員長の雲仙冥利ちゃんです！　皆さんの発する騒音が公害レベルでうっせーつつう苦情^{チクリ}が近隣の部活動から殺到しております、故に適切な処置を取らせて貰いまーっす」

その言葉にオーケストラ部員がざわめき始め、雲仙冥利は楽しそうに周囲を観察する。

そこへ、一部の部員が雲仙冥利に近付き言い訳と共に飴玉を渡そうとする。

相手は子供、適当にあしらえば良いと思ったのだろう。

彼が、その年齢で風紀委員長を務めていて、先程の発言から危険視し警戒するべき存在なのにも関わらず、その様な軽率な動きを見せる部員に誰も警告をしない。

鈍い音がする。

腕を押さえ悶え苦しむ姿を見て初めて骨が折れたのだと理解した。

「気安く触つてんじゃねえよボケが。風紀委員会に言い訳や賄賂が通用する訳ねえだろーがアホが！！俺が出張って来た時点で死刑確定なんだよテメエ等は！！今から殺戮してやつから迅速に死亡しろ！！」

オーケストラ部員から見れば解り安い変貌だっただろうが、この凶暴性はオーケストラ部に訪れた時から見え隠れしていたモノだ。

ただ、この場に居た部員が鈍感だったと言っただけだ。

雲仙冥利の殺戮が終わると、部員等は一人残らず倒れており周囲に有った楽器も無惨にも破壊されていた。

そんな所に生徒会長の黒神めだかに連れられた不知火半袖と一枚のタオルを手に鬼瀬針金が部室の扉を開け絶句する。

風紀委員会に属している彼女も規則違反者には問答無用の暴力を振るう事はあるが、そんな彼女ですらやり過ぎでは無いかと不安視する程の惨状だった。

「おつ、鬼瀬ちゃんじゃん。タオル持ってきてくれたんだ。サンキユー！」

「あ……は、はい」

彼女は、少し怯えながらも返り血で服や顔を汚した雲仙冥利にタオルを渡す。

「ったく、俺は本当にダメだなあ。返り血まみれなのは何時もの事なのに、いつつもタオルを忘れちまう。で、何？ 黒神めだか、何で此処に居るんだ？」

そこまで雲仙冥利が言うと、どうやら依頼が風紀委員会と生徒会の両方へ出されていた様で鉢合わせになったのだと、黒神めだかの話した後、もう少し平和的な解決策は無かったのかと雲仙冥利を咎めた。

その行為、と言うより“平和的解決”と言う言葉が雲仙冥利の逆鱗に触れた。

「甘えんだよ！！ 話して解るか！！ 事情なんざ知るか！！ ルールを破った奴が罰を受けるのは当たり前だろーが！！ ソレをナーにボカしちまったら事情さえあれば許して貰えるって同じ事繰り返すに決まってるだろーが！！ ヤリ過ぎなきや正義じゃねえ！！ ソレが俺のポリシーだ！！」

雲仙冥利の怒号、ソレは己の価値観と信念を掲げたモノで、鬼瀬針金も大半は賛同してはいるものの“やり過ぎ”の線引きが二人の違いだろう。

「不正を正すのが俺達の唯一の目的だ。暴力も武装も手段にしか過ぎねえ。勿論、黒神！ テメエと敵対するつもりも、テメエ率いる生徒会執行部と敵対するつもりも ある！！」

雲仙冥利が右腕を軽く上げたかと思うと、黒神めだかは頭上から激しい衝撃を受ける。

頭上からの攻撃ならば武器は飛び道具か鞭と言ったモノを想像するだろうが、黒神めだかと雲仙冥利には身長差が有り過ぎると、その光景を見た鬼瀬針金が思案するが、武器のイメージが全く付かない。

「……？ おかしいな。今は軽い挨拶代わりだけ？ 見えねえまでも避けれる位には手加減したつもりなんだけど？」

雲仙冥利は黒神めだかの異常性を少しは知っていた様で、避けられなかった彼女に疑問を抱き首を傾げる。

「 貴様から攻撃される理由が無い。故に避ける理由が無い！！」

一般人ノーマルならば気絶レベルのダメージを受けながら、仁王立ちをして堂々と宣言する。

しかし、ソレは雲仙冥利への挑発でしかない。

「へえ、面白え事言うじゃん。 もう一辺同じ事が言えたらベタ褒めしてやんよー！！」

黒神めだかの動体視力が捉える“何か”は頭上からではなく下方から迫り、先程の“挨拶代わり”よりも数段速い。

避けようと思えば可能だっただろうが、黒神めだかは回避行動を行わず衝撃を受け吹き飛んだ。

「ケケッ」

部室の床に仰向けに倒れる彼女の姿に雲仙冥利は嘲笑うと立ち去ろうとするが、その背中に声がかけられる。

「貴様から攻撃される理由が無い。故に避ける理由が無い。言っただけで。褒めるが良い」

「素晴らしい！」

その後、鬼瀬針金の仲裁もあり喧嘩は収まった。

ただし、“戦闘は”である。

「生徒会潰しの為に刺客四人放つちまったぜ？ どうする黒神い！」

「四人？」

雲仙冥利の挑戦状である台詞に違和感を感じ、反応した不知火半袖が問う。

「あん？ 生徒会は黒神を合わせて五人だろーが」

「違つぞ。雲仙二年生」

「あー、じゃあ間違えちまつたか？ 黒神達と良く一緒に居たからなあ」

「因みに誰を？」

無関係な者が襲われるのは不味いと判断した鬼瀬針金も焦つた様に口にする。

「確か、人吉善吉、阿久根高貴、喜界島もがな、真冬冷姫だったか？」

黒神めだかは四人目の名を聞くと同時に、不知火半袖に雲仙冥利の足止めを任せ部室から飛び出して行く。

「あ、貴女は行かないの？」

困惑と焦りが隠せない鬼瀬針金が平然としている不知火半袖に問う。

「勿論、冷姫がやられる訳無いだろうし。……でも、万が一の場合が有つたら風紀委員会を丸ごと喰らうからね」

特に凄む事も睨む事もせず放たれた言葉だったが、鬼瀬針金は背筋が凍るような恐怖を感じた。

黒神めだかが飛び出して十数分後、オーケストラ部の扉が開かれる。

「不知火、風紀委員長ってコイツか？」

「そーだよ　やっぱり無事だったね冷姫」

不知火半袖の言葉に雲仙冥利と鬼瀬針金は驚いた表情をする。

一方、真冬冷姫は髪の毛を掴んで引き摺って来た女子生徒を雲仙冥利の側へ放り投げる。

「その女持^コつて帰ってくれ」

投げ込まれた女子生徒に視線を落とした彼は、確かに真冬冷姫への襲撃を頼んだ人物だと確認する。

「いきなり襲って来るから過剰防衛になっちまった」

「過剰防衛だと？」

雲仙冥利の言葉には怒気が含まれている。

ソレはそうだろう、彼がゴミと称した少女は全身傷だらけな上、両腕、両足を剥離骨折をしているのだから。

過剰防衛の域を逸脱している。

「だいじょーぶだよ冷姫。やり過ぎなきゃ正義じゃねえ　らしいから　ね、風紀委員長」

そこへ挙げ足をとるかの様に不知火半袖が先程、雲仙冥利が言った信念を口にする。

「やり過ぎなきゃ正義じゃ無いねえ、見た目通りガキの発想だな。」

今見た感じでも、器物破損に傷害、暴行に脅迫。犯罪だらけなんだからな、ダークヒーロー気取りたいガキなのは解るけど、そろそろ卒業しとこうな？ 犯罪者クソガキ」

真冬冷姫の全否定を受け、雲仙冥利の信念や心が折れようと軋む音がした様な気がしたが、僅か10歳にしながら耐えて見せた。

「（流石、参加者って訳か）」

真冬冷姫が雲仙冥利へ僅かながらの称賛を送っていると、彼の携帯に着信があり黒神めだかによって生徒会メンバーに加え、襲撃者である風紀委員会すらも助けたと報告が入る。

「味方だけじゃなく敵も救う？ 何処まで聖人なんだ!？」

雲仙冥利が携帯を握り潰す。

「聖人？ アイツが？ アレは只の偽善者だろ？」

「テメエ……黒神の仲間じゃねえのかよ」

真冬冷姫は黒神めだかが聖人と呼称した雲仙冥利の言葉を否定すると、驚いた表情をする。

「仲間？ 俺がアイツの？ 冗談は辞めてくれ、俺はアイツが嫌いなんだ」

「 に、しては何時も一緒に連るんでんじゃねえか」

「面白いからな。ソレにアイツが今ソレを見たらプチ切れてると思

うぜ?」

そう言っつて彼は潰した女子生徒を指差す。

「アイツは俺の事なんて何一つ解っていない」

口角を吊り上げて述べる彼に雲仙冥利の全身が告げる。

逃げる。逆らうな。

「そうかい。だがなあ部下をやられて何事も無く終わらせる訳に行かねえんだよ!」

しかし雲仙冥利は、その警告を無視して黒神めだかにも使用した攻撃を行う。

真冬冷姫は黒神めだか同様に避ける事無く上下からの衝撃を受ける。

しかし、痛がる様子も傷すらも無かった。

「気は済んだか? コレは過剰防衛の罰っつて事にしといてやる」

雲仙冥利は心臓を鷲掴みにされた様な不快感と共に尋常では無い恐怖心を抱く。

「……鬼瀬ちゃん。救急車を呼んでくれコイツの事頼んだ」

命に別状は無く、気絶している女子生徒を鬼瀬針金に任せ、不知火半袖が塞いでいる出入り口の横に位置した壁を蹴り壊して出て行った。

不知火半袖も任せられたのは出入り口である扉だけだと、ソレに
関与しなかった。

「それにしても冷姫。殺さないなんて優しくなったねー」

「不知火の爺さんに殺すなって言われてんだよ。お陰で英雄気取り
も殺し損ねた」

その会話を聞いていた鬼瀬針金が救急に連絡後、震えながら女子生
徒の止血を行っていた。

「さてと、不知火これからどうする？」

「お腹空いたから帰るよ」

「……食いに行くか？ 奢るぞ？」

「デートしようって素直に言えたら付き合っただけあげる」

「解った解った。デートに行くぞ」

「おっけー」

殺人とデートの会話を続けて行う二人は、何処からどう見ても異常
であり、彼等には通常な行為である。

一般生徒は完全に下校を済ませた時刻、生徒会室から激しい爆発音
がする。

黒神めだかのみが傷だらけになっており、他の生徒会メンバーは擦り傷程度である。

その後、乱神モードと呼ばれている状態になった黒神めだかが雲仙冥利の一方的に暴行を加える。

「アレが黒神めだか」

校舎の屋上から黒神めだかと雲仙冥利の戦闘を眺める人物が居た。

「性善説を唱えておきながら、許せないからタコ殴りかあ。笑つちやう」

その台詞は、まるで真冬冷姫の全否定にも似ている。

「まあ、私の出番は未だだけど」

その人物は消える。日之影空洞の様に認識出来なくなったのではなく、初めから居なかったかの様に“消えた”のだった。

「このサイコロを何も考えず軽く振って下さい」

理事長室に呼び出された真冬冷姫は理事長である不知火袴と向かい合つと直ぐに8つの賽を机に置かれ先程の台詞を述べた。

「懐かしいな。何年振りだ？」

8つの賽に手を伸ばしながら呟いた。

「そうですね。16年振りです」

此処で矛盾している。

真冬冷姫は現在15歳、当然16年前に不知火袴と出逢える訳が無いが、彼の場合はソレで矛盾とは言い切れない。

真冬冷姫は幼少時、自身の^{スキル}全否定を^{コントロール}支配出来無かつた。

故に、彼の全否定に含まれている“不老不死”が随時発動していた為に肉体的及びソレに準ずる身体的成長が四年間止まっていたのである。

これにより、真冬冷姫の実年齢は現在の年齢十五歳プラス四歳の十九歳となる。

「ふーん」

自分から聞いたといて答えには一切の関心も無く、8つの賽を転がした。

賽が机を叩く音が少し続くと机上には一つの賽のみが1の目を出していた。

つまり、8つの内7つは粉々に砕け文字通り粉となっていた。

「素晴らしい！！ やはり真冬くんには是非とも計画に参加して貰いたい！！」

「……そんな事よりさ、覗き見に盗み聞きしてる奴等は殺して良いわけ？」

真冬冷姫から見れば当然の結果。何処からどう見ても異常な事（ふじょう）に不知火袴が熱く計画への参加を勧める姿勢に煩わしく感じながらも、周囲の存在に関心を奪われ、冷めた瞳で不知火袴に問い掛ける。

「やはり気付きましたか。皆さん出てきて下さい」

理事長の後方から現れる者、天井から現れる者で真冬冷姫は囲まれる。

「こんなので計画なんて無理だろ」

周囲の異常者（にんげん）を眺めた第一声に理事長室に冷たい空気が流れる。

「何？ 文句あるなら御自由にどうぞ。まあ全否定（オシ）が心身共に潰してやるけど」

「あんたねー」

「辞める古賀ちゃん!!」

真冬冷姫の挑発に乗りかけた一人の少女だったが、顔を包帯で覆った一人の少女に止められる。

「…………お前、黒神の姉か？」

「久しぶりだな。真冬」

自身の顔を隠す様に巻かれていた包帯を外す少女。

「なんだ。また不幸体験がしたいのかと思ったけど。違ったか？」

「ああ、もう不幸になるうとは思ってねえよ」

「残念。お前の鳴き声可愛かったのに」

「ドエス野郎め」

真冬冷姫は親しげに、包帯を巻いていた少女は忌々しげに会話をする二人を見て周囲の人間は困惑していた。

「名瀬ちゃん？」

そこへ先程、真冬冷姫の挑発に乗りかけた少女が話しかける。

「名瀬？」

「あ、ああ…………。今は名瀬妖歌って名乗ってたんだ」

「ふーん。黒神を捨てた不幸少女ってヤツ？」

「ち、ちが……う」

「アンタ、名瀬ちゃんに何したのよー！」

明らかな動揺と恐れている表情をしている名瀬妖歌を見て、先程の少女が元凶であろう真冬冷姫に噛みつく。

「別に？ 不幸になりたがってたから、手伝ってやっただけ」

「手伝う？」

中学時代、偶然にも彼等は邂逅し名瀬妖歌の不幸になりたいと言う異常性を聞いた真冬冷姫は、彼女に“不幸”と“不運”を身に宿らせた。

「不幸と不運？」

少女が訝しげに聞き返す、周囲の人間も興味深そうにしている。

「そうさ、五体満足なのは幸福な事だ、五感が正確に機能しているのも幸福な事だ、健康体なのも幸福な事だ、事故に遭わないのも幸福な事だ、事件に巻き込まれないのも幸福な事だ、通り魔に襲われないのも幸福な事だ、虐められないのも幸福な事だ、痴漢に遭わないのも幸福な事だ、強姦されないのも幸福な事だ、大好きな研究が出来るのも幸福な事だ、研究が出来る環境に居るのも幸福な事だ、生きてるのは幸福な事だ。その他諸々の幸福を一切合切奪ってやっただけ」

つまり、と真冬冷姫は言葉を続ける。

「五体満足では無くなり、五感も狂い、重病を患い、トラックに轢かれ、事件に巻き込まれ犯人扱いされ捕まり死刑判決が下され、通り魔に身体を刺され切られ、自殺したくなるような酷い虐めに遭い、痴漢に身体を好き放題にされ、レイプされ、大好きな研究が出来なくなり、研究が出来る環境を追い出され、その他諸々の不幸と不運を味わい、その全てに死が纏わり付く。ただ、それだけのこと」

真冬冷姫の長く重い話が終わる。

周囲の人間も名瀬妖歌の為に彼に噛みついた少女も、顔を青ざめさせている。

「名瀬ちゃんは、そんな目に遭ったの？」

「いや、全て未遂。一時間もしない内にギブアップして、不幸にはなりたくない」と泣き叫んでたよ」

面白そうに愉しそうに笑みを溢しながら言う真冬冷姫にとって、これ等の事は所詮“暇潰し”でしかなく黒神くじらこと名瀬妖歌の助けて（ギブアップ）の言葉と共に彼女に宿らせた不幸と不運を無くし、彼女を襲っていた不幸と不運から助けたのである。

「真冬、私は……」

また同じ目に遭わされるかもしれない恐怖が彼女を襲っていた。

「良いぜ？ 見逃してやっても、俺の前で不幸になりたいだの何だ

の言わないならなあ」

名瀬妖歌はまるで、絶望の縁にいた自分を救う手を差し伸べられた様な錯覚に陥る。

「ありが、とう」

これは既に洗脳の域に入っているだろう。

自作自演の人助け、恐怖心を自分で与えソレ等を自分の手で取り除いてやり、安心や信頼を与え依存させる。

まあ真に恐ろしいのは、これ等を意図してではなく素で行っている部分である。

「名瀬ちゃんは、無事なの？」

青ざめさせた顔で掠れた声から、真冬冷姫に対して多大な恐怖心を抱いたのだろう。

「何を無事って言うのか知らないけど、五体満足、五感も正常、健康体で研究も出来て生きてる、序でに処女。無事なんじゃない？」

「処女で悪かったな！！」

どうやら名瀬妖歌に洗脳が填まった様で、真冬冷姫への安心や信頼により通常運行に戻り、彼の発言に噛みつく。

「やはり、君には計画への参加を強く申請したい」

絶対零度にまで下がった空気の中、不知火袴が計画の話を掘り返す。

不知火半袖のKYは祖父譲りな様だ。

「その前に少し良いか？」

真冬冷姫の拒否の言葉を紡ぐ前に横槍の言葉が入り、一同はその声の人物の方へ視線を動かせる。

「何だ王サマ気取り、計画参加者だったのか」

「クツ、相変わらず無礼な奴だ。そんな事よりも理事長は先程16年前と言ったが、貴様は今15だろう」

「ああ、それは俺の能力アフノーマルを直ぐに解る」

「何だソレは言え」

真冬冷姫にとって能力は自分の一部な為、話す事は自己紹介と同義なので吝かでは無いのだが、上から目線の態度に虐殺ひたしてしたくなる。

「都城先輩。彼に対して上から目線の態度は自殺行為です」

横柄な態度を貫こうとした彼に真冬冷姫の凶悪マイナスな部分を知る名瀬妖歌が忠告する。

「ふん、自殺行為か我には関係無い」

名瀬妖歌の忠告を受けても尚、彼は態度を変えなかったが。

「跪け」

真冬冷姫の透き通った声が聞こえたかと思うと、地面に叩き付けられた。

「王土!？」

その現象に仮面を付けた少年が声をあげる。

「なあ、黒神の姉みたいな不幸体験してみるか？」

地面に叩き付けられた彼の頭を踏みつけながら、見下すような目で脅す。

「こ、これは一体何だ!？ お前の能力は何なんだ!？」

「良いぜ、教えてやる。“全否定”と“有言実行”だ」

「な……。能力が二つ!？」

「どう言った内容なんだ？」

周囲の人間が驚愕するなか名瀬妖歌が問う。

「先ず、“全否定”は不、無、非、未で作れる否定する単語を使う。例えば、不幸、不運とかな。“有言実行”は俺に対して言った言葉を自分が行う様に強制する力、例えばコイツが俺に言った跪きを俺が言う事によって能力が起動し、強制実行させる。」

そこまで語ると真冬冷姫は心底愉しそうに笑みを溢す。

「だから、滅多な事は言わない方が良い。さてと理事長、俺は計画には加わらない。“不参加”だ」

それだけ言うと真冬冷姫は理事長室から退室しようとするが、扉の前で立ち止まり振り返る。

「そうそう忘れてた。俺の年齢が合わない件だが、“全否定”の能力説明で気付いただろ？ “不老不死”それが理由」

言いたい放題、やりたい放題、好き勝手に荒らしていき、室内の重い空気も、その場に居た人物達へ与えた印象も感情も自分には“無関係”だと言わんばかりに退室していった。

「何なのアレ」

真冬冷姫の退室後に訪れた静寂を破ったのは、最初に彼へ噛み付いた少女、名瀬妖歌の親友にして彼女の手により望んで改造を受けた半サイボーグ、古賀いたみ。

「ただの、普通な人間だ」

彼女の問いに答えたのは、真冬冷姫の手により正真正銘の不幸を体験させられた黒神くじらこと名瀬妖歌。

「普通だと!?!? アレでか!?!?」

名瀬妖歌の解答に驚いた声を出すのは、信念を否定され屈辱を味あわされた都城王土。

「どう見ても、僕よりも危険だと思うんだけど」

先程までは一切の発言をしなかったが、何度か真冬冷姫の隙を伺っては殺そうとし、悉く動く前に失敗していた計画の参加者で全国指名手配されている殺人鬼、宗像形。

「僕が感じ取った思考も殆ど殺意で埋まってたよ」

都城王土が地面に叩き付けられた時に取り乱した仮面を付けた少年、行橋未造。

「ソレ等も全て含めて彼は危険人物なんだ。私は計画ふじゅうを続けるつもりだが彼と敵対する事になるならば真つ先に裏切らせて貰う。死にたくないからな」

「死ぬつて、大袈裟じゃないかな？」

名瀬妖歌の発言に流石にそれは、と言った感じで古賀いたみが言う。

「そう思うか？ 私に使った“不幸”と“不運”は死ぬ事を前提としたモノだ。本人も言ってたしな生きてるのは幸福な事だって、つまり、直接的ではなくても間接的に殺せる訳だ」

そして、と名瀬妖歌を心の奥底から恐れさせた一つの能力を口にする。

「本人が説明した“全否定”に在るだろ？ 自分の罪を無くす、“無罪”って単語が、真冬は例え人を殺しても罪人として裁かれないんだよ」

此処まで聞いて古賀いたみは息を飲む。

真冬冷姫と敵対しても何の得はない、寧ろ全てを否定こわされるだけ。

その事を黙って聞いていた理事長は再認識した。

これは過去の出来事。

完全下校時刻を過ぎ校内には二人の男女の姿があった。

男女　少年と少女は邂逅し対峙している。

少年の瞳は何を写しているか解らない光を失った様に濁っている。

少女の表情は笑みを浮かべており、その綺麗な顔立ちに良く映えるのだが全くもって薄気味悪いを遥かに越えた気味の悪さがあった。

「面白いモノを見てるんだね。僕は安心院なじみ、親しみを込めて“あんしんいん”と呼んでくれ」

「……それって良く“アンシンイン”って間違えられるから先手打ってんの？」

この会話だけで二人の関係は険悪なモノと判断できるだろう。

「ふふ、酷いなあ。ねえ君も自己紹介してよ」

「……真冬冷姫。覚える必要もない下等生物」

「いやいや、自分の事を卑下にはいけないよ？」

「同じ下等生物の分際で上からモノを言うな」

一瞬、いや刹那の時間、安心院なじみの表情に変化があったが常人ならば気付かないだろう。

「ふふ、惚れちゃいそうだ。キスをして良いかい？」

彼女の目的は真冬冷姫が身に宿す異常と過負荷である。

口写し（リップサービス）。キスを行う事で能力を与えたり交換したり奪えたりする能力。

「良いよ？ その代わりキスの後、殺して良い？」

光を失った様な濁った瞳が期待する様なきらびやかさを宿す。

それと同時に溢れる狂気、と言うより殺意だろうか。

安心院なじみが真冬冷姫の視界を通して視た世界は、全てが否定され、海は枯れ、山は崩れ、木々はへし折れ、建築物は倒壊し、大地は割け、有象無象にんげんの屍で埋め尽くされていた。

「勿論」

安心院なじみは疑わない。

1京の数を越える能力を使えば真冬冷姫から能力を奪うのは容易いと。

唇が重なって直ぐに口写し（リップサービス）だけでなく、他の能力まで無効化、無力化されている事に気付き真冬冷姫の体を突き飛ばす。

「ひっで、キスしたのアンタじゃん」

先程までの機械的な話し方ではなく、感情を剥き出しにした言葉遣いに変わる。

「俺から能力を奪おうなんて酷いよねー、普通いじみょうになっちゃっじゃん」

無表情のまま楽しそうに声を弾ませる。

その直後、安心院なじみ以下第三者の視界から真冬冷姫の姿が消える。

正確には視認する事が出来なくなったのだが、安心院なじみは自身の背後に手を翳すと“何か”が校舎の壁を砕く程の勢いで吹き飛ばす。

「驚いた。“不可視”は正常に機能してた筈だったが？」

砕けた壁から真冬冷姫が姿を現すと呟くように問う。

「パラサイトシーイング欲視力。他者の視界を覗き見る能力だよ」

「成程。ソイツで俺の接近に気付けた訳だ。それにしても、能力を奪うスキルに、俺を吹き飛ばしたヤツ、アンタいつたい幾つ能力を所有してんだ？」

「ふふ、7932兆1354億4152万3222個アフノーマルの異常と、4925兆9165億2611万643個マイナスの過負荷。計1京2858兆519億6763万3865個だよ？ あ、今1個貸出し中だから1京2858兆519億6763万3864個だね。チャンスじゃない？」

「はあ……黒神めだか（バケモノ）の次は安心院なじみ（チート）」

かよ。まったく、何でもかんでも“無効化”や“無力化”出来る訳じゃねえのに」

「ん？ そうなのかい？」

安心院なじみ自身も真冬冷姫の“無力化”や“無効化”は魅力的なモノだった。

だからこそ欲しかったのだが、その能力を所有する本人は万能ではないと言う。

「そりゃそうさ、何たって“未完成”で“不完全”で“無能”で“不安定”で“非力”で“無力”で“無価値”なんだから」

彼が所有する全否定は互いの能力を互いで否定しており、この世に存在していること事態が異常な能力である。

「よって、俺の能力を奪うとアンタが今所有してる能力が使えなくなったりするよ？」

そこまで話すと両手の指の間に一本ずつ、計八本の鉛筆を挟み持った直後、二本が安心院なじみの両目に一本ずつ突き刺さり、二本が両手に一本ずつ掌から甲へかけて貫通し、一本は額を貫き、一本は喉を貫き、一本は左胸の心臓付近を貫き、一本は鳩尾を貫かせていた。

「チツ、これでも死なねえのか」

安心院なじみの身体を貫いた筈だった鉛筆は全て何事も無かったかのように廊下に転がり、彼女自身も傷一つ付いてはいなかった。

「これは？」

「カオスブレンド混沌合成。ただの足し算さ、 $1 + 1$ も $100 + 100$ も全て等しく 1 になる足し算」

先程の現象も鉛筆（ 1 ） $\times$ 数と安心院なじみ（ 1 ）を足しただけである。

結果、いや“解”として、失明（ 1 ）や死（ 1 ）となる。

そして、コレが真冬冷姫の過負荷マイナスである。

勿論、全否定の効力で威力は激減している。なんて事はなく、マイナス+マイナスはマイナスである為、威力は激減どころか激増している。

「へえ、にしても何故鉛筆なんだい？」

「球磨川は螺を武器にしてるだろ？ そのパクリ+パクリ？ ああ、何処かの文房具使いの蟹女って言えば解る？」

「そう。ねえ真冬冷姫くん。ノットイコール悪平等に入る気はないかい？」

安心院なじみは真冬冷姫の視界を覗き見た時から彼を勧誘する事を決めていた。

全てを“平等に否定している”のだから、彼女の思想に似ているのだから。

「何それ」

安心院なじみは悪平等の事を話す。

自分以外を平等に無価値だと言う思想。

しかし、間違えてはならない。

安心院なじみは“自分以外を”無価値だと言うが、真冬冷姫は“自分を含めた全て”を否定しているのだ。

彼女からの説明を受けた彼の出す解は初めから決まっていたも同然なのだ。

「断る」

迷うこと無く一蹴し、殺せないなら用は無くなった為、殺戮^{ひてい}願望は不完全燃焼として終わってしまい真冬冷姫は安心院なじみの前から去る。

これが、彼等の初めての邂逅。

その後、球磨川楔と行動を共にする様になった真冬冷姫は、副会長だった安心院なじみと必然的に再開し現在の恋愛関係にまで発展したのだった。

何処かの学校の何処かのクラス、そこは真冬冷姫と安心院なじみが彼等曰く半年ぶりに再開した場所であった。

「まったく。随分と懐かしい夢を見てるんだから」

そう呟くのは安心院なじみ。

彼女は“この場所”で真冬冷姫が来るのを待っていたのだが、彼が眠りに落ちても来ない為、“アリバイブロック 腑罪証明”を使用し真冬冷姫の夢の中へ入り込んだのだった。

「ふふ、これからも愛してあげるよ。冷姫」

頬を軽く朱に染めて愛される事を望む彼を想い一人呟いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0692t/>

誰が何と言おうと普通

2011年10月2日19時33分発行